

モーセ五書



創世記 出エジプト記 しび記 民数記 申命記

空知太栄光キリスト教会牧師

銘形 秀則

目次

序 説	1
1. 聖書とは何か(啓示、靈感、無謬、正典性)	
2. 旧約聖書と新約聖書との関係	
3. モーセ五書の著者と構造と聖書全体における位置づけ	
4. 附記・・地図思考の大切さ	
創世記	5
1. 創世記の記者の視点と意図	
2. 創世記の主題	
3. 創世記の構造	
4. 創世記 1章～11章までの主要な出来事	
5. アブラハムから始まる神の救いの計画	
6. アブラハムの生涯とその転機	
7. アブラハムに対する神の約束	
8. イサクに対する神の約束	
9. ヤコブの生涯とその転機、および神の約束	
10. ヨセフの生涯と出エジプト記との関わり	
出エジプト記	13
1. 出エジプト記の主題、および構造	
2. 出エジプト記の重要なキー・ワード主題(目的)	
3. 神の民の成立のために、神がなされた四つの出来事	
4. 神と神の民イスラエルが結んだ契約	
5. 幕屋建造とその目的	
レビ記	19
1. レビ記の主題、および構造	
2. 聖なる神に近づく道	
3. レビ記におけるトピック	
民数記	23
1. 民数記の主題、および構造	
2. 人口調査とその意味	
3. 秩序立った配置、および神の導きによる整然とした移動、奉仕分担	
4. 不信仰的判断の暴露	
5. 権威に対する反逆の霊	
申命記	27
1. モーセ五書全体の主題と申命記の主題	
2. 申命記の名称、執筆意図、および時期回顧と展望	
3. 申命記の構造	
4. モーセ五書、および旧約における位置付けと危機的性格	
5. 申命記の鍵語とその使信	
6. 申命記と新約聖書	

序 説

1. 聖書とは何か

〈はじめに〉◆聖書をどう見るかということはキリスト者にとって実に重大な問題である。なぜなら、どのような聖書観を持つかによって、救いのみならず、聖書の解釈の仕方、説教、伝道、牧会、教育の仕方が決定づけられるからである。プロテスタント教会は『全聖書の66巻は、すべて神の靈感によって書かれた誤りなき神のことばであり、主イエス・キリストによる救いと生活の唯一の規範(正典)である。』と告白する。⇒Ⅱテモテ3章15節～17節参照。

啓示性

「聖書は神によって啓示された書である。」啓示とは、神が人の意識に自己を開示することである。啓示には、自然界や歴史を通して神の存在の認識を与える《一般啓示》と、預言者や神の御子イエス・キリストの語りかけや行為を通して神ご自身を表わす《特別啓示》とがある。《特別啓示》の必要性は人間に救いを見出させるためであり、そのクライマックスはイエス・キリストの十字架と復活の事実である

靈感性

神は預言者たちを通して、多くの部分に分け、いろいろな方法でご自身を啓示された(ヘブル1章1～2節)。その啓示が誤りなく人間に伝達されるために、神は適当な人を選んで特別な聖霊の導きを与えた。この聖書の聖書記者たちへの特別な働きを《靈感》と呼ぶ。聖書は聖書記者(40数名)が「聖霊に動かされ、持ち運ばれて語った預言的なことば」の記録である。⇒Ⅱペテロ1章19～21節参照。

無誤性

「聖書は原典において誤りなき神のことばである。」

- ①聖書の〔無誤性〕とは、救いや信仰に関することだけでなく、歴史的、科学的な分野における記録においても誤りがないという意味。
- ②聖書の〔無謬性〕とは、救いや信仰に関してのみ誤りがないという意味。
- ③福音主義とは前者の立場に立つ。無誤性の主張は聖書理解の根幹に関わることであるゆえに重要である。もし無誤性を失うなら、将棋倒しのような現象が起こり得る懸念がある。
- ④「原典」とは聖書の原初本文を意味する。すなわち聖書各巻の原著者の自筆原稿。しかしこれは現在、存在しない。その存在を確認することは不可能であるが、それにほぼ同じと言って差し支えないほど正確に復元された写本を現代の教会は持っている。

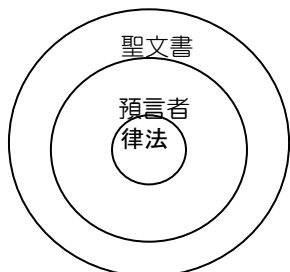
正典性

- ①正典という言葉は規範とか基準を意味する。プロテスタント教会においては旧約聖書39巻と新約聖書27巻の計66巻からなる聖書のみを、信仰と生活の唯一の規範としている。規範とは、単なる判断の基準だけでなく、私たちを拘束する権威をも意味する。このことを正典ということばで表現する。カトリックは、この他に外典(20書)を含めており、ほかに教皇、伝統を権威として認めている。また、ものみの塔、統一協会、モルモン教も聖書以外の書物を聖書と同等、あるいはそれ以上の権威を持つものとして認めている。
- ②聖書は66巻の各書はそれぞれのかげがえのなさを持っている。つまり、それぞれの著者による個性や主張の多様性(矛盾、非合理、対立)を持っており、同時に66巻の全体は統一性を持っている。その統一性は α.聖書全体が救いの歴史であること β.各書がキリストを証言していること(⇒ヨハネ5章39節参照)。γ.約束が実現していることなどに見られる。こうしたことは、聖書の真の著者が聖霊でなければ考えられない。
- ③正典としての聖書は「あるがままの聖書を問う」立場である。たとえば、矛盾や相異なる考えと思える聖書の教えを、人間の合理的見解で止揚したり、調整したりしないで、そのまま受け入れる立場、すなわち《一元的把握の立場》を取る。つまりAもBも真なりとして受け入れる立場である。

2. 旧約聖書と新約聖書との関係

(1) ユダヤ教とキリスト教における旧約聖書の理解の相違

- ① ユダヤ教《法的理解》⇒「律法」「預言」「詩歌」・・・権威の順に並んでいる。【図1】参照
- ② キリスト教《救済史的理解》⇒「律法」(モーセ五書)「歴史書」「詩歌」「預言書」【図2】参照



【図1】 ユダヤ教の聖書理解はキリスト教のように救済の歴史とは考えられていない。

- A 律法<トラー>(創世記～申命記までの5巻)・・・**基本法**
- B 預言書<ネイビーム>・・・**基本法の解釈と応用**
 - i 前預言書(ヨシヤ記～列王記の4巻)
 - ii 後預言書(イザヤ書～12の預言書の4巻)
- C 聖文書<ケスビーム>・・・**基本法の参考書**
 - i 詩歌(詩篇、箴言、ヨブ記の3巻)
 - ii メギロテ(雅歌、ルツ記、哀歌、伝道者の書、エステル記の5巻)
 - iii 歴史書(ダニエル、エズラ、ネヘミヤ、歴代誌の3巻)

【図2】 キリスト教の旧約聖書は救済史として理解されている

モーセ五書(創→申)	歴史書(ヨシヤ→エステル)	聖文書(ヨブ→雅歌)	預言書(イザヤ→マラキ)
------------	---------------	------------	--------------

(2) 旧約聖書と新約聖書との統一性

- ① 神の救いの計画(救済史)・・・神の救いのみこころが歴史的叙述の形で表現されている。
- ② キリスト証言・・・ヨハネ5章39節、ルカ24章27節、44節を参照。
 - α. ユダヤ教・・・旧約聖書を神の言葉とし正典として信じているが、ユダヤ教は旧約に預言されているメシヤはまだ来ていないと信じている。当然のことながら、ユダヤ教は旧約とは言わない。
 - β. キリスト教・・・旧約に預言されているメシヤはイエスにおいて成就したと信じており、旧約聖書を《キリスト証言》の書として受け取っている。
- ③ 約束と成就・・・マタイ5章17節、ルカ24章25～27節、44～47節を参照。

3. モーセ五書の著者と構造と位置付け

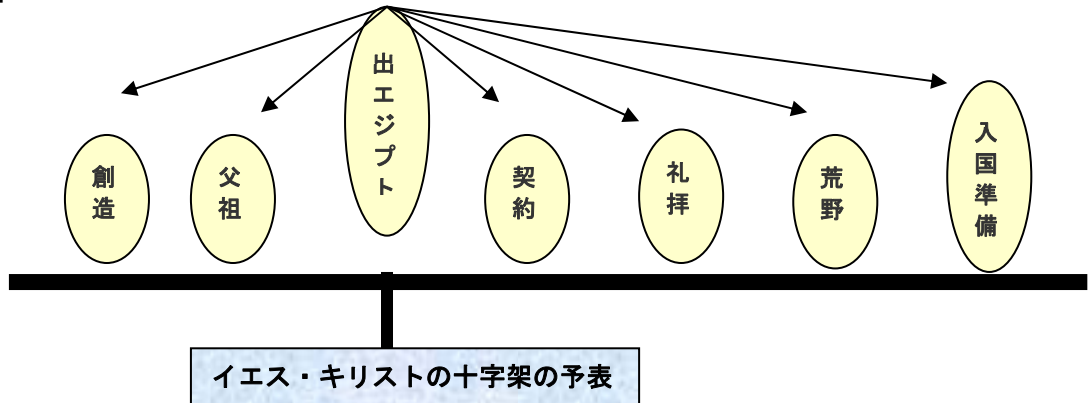
(1) 著者・・・モーセ

(2) 構造・・・創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五書からなる。

(3) モーセ五書の統一性と構成の意図

- ① モーセ五書を一つのまとまりとしているものは何か
 - α. 文学的表現・・・「はじめに、そして、そして、・・・これらは」という接続詞
 - β. 救済史的内容
 - 「墮落した人間(創世記)が、救い出されて神の民とされ(出エジプト記)、神を正しく礼拝しながら(レビ記)、信仰の旅路を歩み(民数記)、やがて約束の地に向かって望み備えつつ歩む(申命記)という構造を持っている。」
- ② モーセ五書の構成された配列とその流れを可能とする中心的出来事との関係⇒【図3】五書全体は、出エジプト記の救いの光から見直されて記されている。これは新約の共観福音書がやはり、イエス・キリストの復活の光からイエスの救いを見直しているのと同様である。

【図3】



(3) 旧約聖書におけるモーセ五書の位置付け

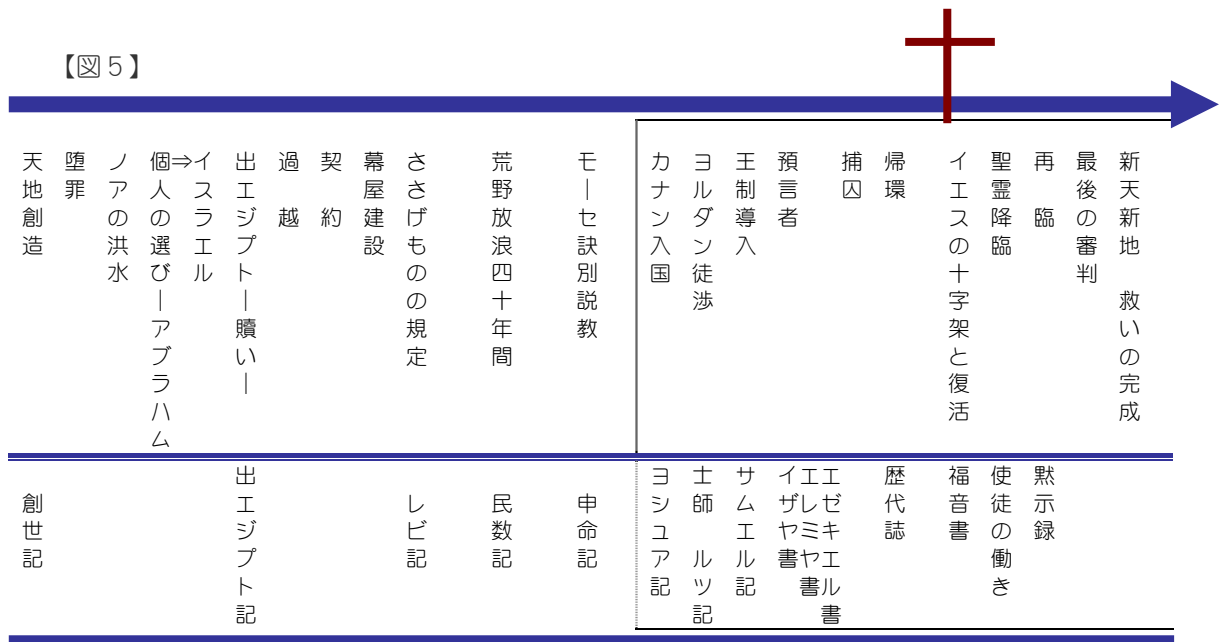
- ①モーセ五書は旧約聖書全体の土台となっている。⇒【図4】
- ②モーセ五書の中心的事柄 ⇒【図5】
 - α. 創造主なる唯一の神
 - β. 創造の冠としての人間の創造と墮落
 - γ. 救いの担い手としてのアブラハムの選びと約策
 - δ. 贖いと契約
 - ε. 幕屋の建設(神に近づく礼拝の方法)



預言書	矯正と利将来的展望
詩歌	現在的、歴史的断面
歴史書	歴史的展開
モーセ五書	神と人との交わりの土台

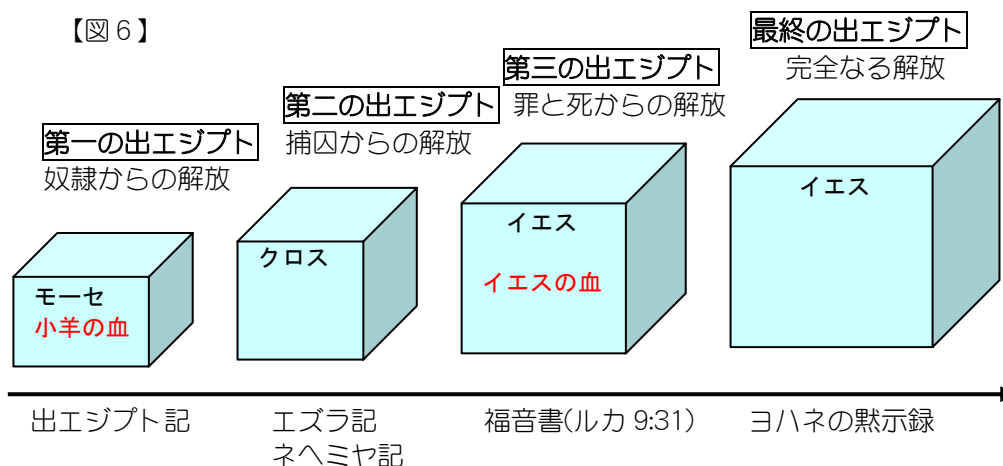
【図4】

【図5】



(4) 聖書全体におけるモーセの位置付け

主イエス・キリストによる十字架の贖い、新しい契約の予型となっている。⇒【図6】参照
出エジプトの経験はその後の救いの歴史において、きわめて大きな重みをもつ予表となっている。



4. 附 記・地図思考で聖書を読む、つまり常に全体から部分へという見方、捉え方である。

- ① 地図思考とは「上空から見下ろす鳥のような視点で情報を理解すること」である。それによって全体を客観的に見渡せるということこそ、地図思考の最大の利点なのである。
- ② 特に、聖書を理解する上で(とりわけ神の救いの歴史を理解する上で)、上から見下ろすということは、重要な鍵を握っている。
- ③ 「木を見て森を見ず」ということばがある。ひとつひとつの木に注意がいているならば、森の中で迷いかねない。どこに出口があるのかわからないということになる。そうした過ちに陥らないために、できるだけ早期に聖書の全体像を把握することに務めることが大切である。常に「森から木を見る」、全体から部分へ、上から全体像を把握する訓練を積むこと、これが神学をするということである。この「旧約聖書概論」はそうした視点からまとめられている。地図思考の大切さを学んでいただくことが、この概論のねらいのひとつである。



「あなたは熟練した者、即ち、真理のみ言葉をまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分をささげよう、務め励みなさい。」(Ⅱテモテ2章15節)

創世記

1. 創世記の記者の視点と意図

- (1) **【視点】**・・・モーセ五書の著者であるモーセは、創世記を出エジプトという救いの事実から見直して書いている。つまり、イスラエルの民にとってエジプトからの救出の出来事は、彼らの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブとの契約関係のゆえになされたことであることが啓示される。^{※脚注}そしてさらに、神の救いの計画のために選ばれたアブラハムと最初の人アダムがどのような関係にあるかという視点から叙述されている。
- (2) **【意図】**・・・創世記は、モーセ五書や旧約聖書だけでなく、聖書全体の序論的性格、すなわち神の救いの歴史(救済史)の**【はじめ】**を示す意図がみられる。天地創造のはじめ、人類のはじめ、罪のはじめ、神の民のはじめ(すなわち、神の救いの計画の本格的な担い手としてのはじめ⇒信仰の父アブラハム)が記されている。

2. 創世記の主題

創世記の主題は《神の民のはじまり》である。そこには、墮落した人間(世界)の救いを担う神の民がどのようににはじまったかが記されている。

3. 創世記の構造

序 (1～11章)	【出来事】が中心	本論(12～50章)	【人物】が中心
創造、墮罪、罪の増大とさばき(洪水、バベル)		アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ	

4. 創世記1章から11章までの主要な出来事

- (1) **天地創造(1章)**・・・聖書の神は唯一にして創造主なる神である。被造物とは完全に区別される存在。日本においては、この創造主という概念はきわめて希薄である。
 - ①「はじめに神が」・・・神は永遠なる方として、すべての創造の前提として存在する。
 - ②「創造した」(バーラー)・
これは無から有を生じさせる神の行為を表わすことば。神はみことば(意思)をもって天地万物を創造された。ヘブル11章3節参照。
 - ③「神概念を表わす神の名」
 - α.神(エロヒーム)
人間とは無関係に存在する神の概念。唯一、永遠、完全、不変、全知、全能、偏在・・・の神を表わすことば)
 - β.神である主(ヤウエ)
主なる神とも言い、人間の創造とともに、人間と交渉をもたれる神概念。特に、神の救いのみわざに関わる方として、愛、義、公正、真実、恵み、あわれみ深い方としての神を表わすことばとして用いられる。
- (2) **創造の冠としての人間の創造(1、2章)**・・・それ以前の創造は人間が生きるための舞台設定。
 - ①「神のかたち」に造られた人間
 - ◆人間は被造物の中でも特別な目的で、特別な方法で神によって造られた存在である。神はすべての植物や動物を「種類にしたがって」造られたが、人の場合は「神のかたち」に似せて造られた(1章26、27節に「かたち」ということばが3回繰り返されている)。

※脚注 神が神の山ホレブでモーセにご自分の民をエジプトから連れ出し、神に仕える民とするために遣わすという召しを与えられた。そのとき神は、モーセにご自身を「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」(出3章6節)と啓示された。

この事実こそ、他の被造物から区別された創造の冠としてのユニークな存在理由がある。

② 「神のかたち」とは何か

それは、外見的なかたちを指すものではない。なぜなら、神は霊なる方だからである。

「神のかたち」とは、

α. 神の霊を持つ存在である

「神である主は、・・・その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は生きものとなった。」(2章7節)

β. 人格的存在である

人格的存在とは交わりによって生かされる存在である。それは三位一体の神(父、子、御霊)が持っているゆるぎない永遠の関係であり、それは人間の男と女の関係において投影される。

◆このように、人は「霊的・人格的存在」として神との交わりを必要とし、また、男・女、あるいは人間同士との交わりを必要とする。それゆえ、「人はひとりであるのは良くないのである。人格的存在とは、その存在が認められ、受け入れられ、喜ばれ、愛されることによってはじめて輝き出す存在なのである。そのような扱いを受けることがなければ、その存在は輝きを失い、心に大きな傷を受けることになる。

③ 「ふさわしい助け手」の創造

α. 対等性・・・女が男から取られたとい創造の秩序を認めつつ、神の前に対等の存在。

β. 相補性・・・自分にはないもの補ってくれるかけがえのない存在。

γ. 自己投影性・自分を映し出す鏡として、自分自身を知るための大切な存在。

④ 「結婚の秘儀」・・・「男はその父母を離れ、妻と結び合い、二人は一体となる」(2章2 4節) 一体となることによって神のかたちが成立する。

(3) 墮罪(3章)・・・人間の罪の起源

① へびの誘惑・・・α. 疑心を起こさせた β. 偽りの知識(情報)を与えた

◆サタンの化身であるへびの意図は、人をして神のことばを全く信頼して従うという立場から引き離すことであった。

② 墮罪の結果

α. 目が開かれ裸であることを知った

β. 腰を覆った

γ. 神の御顔を避けた

δ. エデンの園からの追放(それは神との交わりの死を意味する)

◆人がサタンの言うことに聞き従ったとき、目が開かれ自分が裸であることを知った。そのことによって恐れや羞恥心、臆病、嘘、良心の呵責、罪責感、責任転嫁等が生じた。彼らは「いちじくの葉をつづり合わせて腰に巻いた。それは人が自分の状態を自分の考えで改善しようと**最初の**記録である。宗教とキリスト信仰との違いは、前者が自分は裸であるという意識から発して自己の状態を改善しようとする努力の営みであるのに対し、キリスト信仰は人が義の衣を着せられるという恵みの事実から出発している。

(4) 原福音(3章1 5節)・・・神が人間のために立てた救済計画の最初の直接的預言

◆「女のすえ」(単数)は、サタンとの戦いにおいて傷つくが、いつの日にかサタンの頭を砕いて、これを完全に打ち破るであろうという預言。人が罪によって離反した後、**はじめて**、贖い主の約束を与えられた箇所である。原福音ともいわれている。

(5) 人類の中で働く罪の増大(4章～9章)

① 家庭(4章) α. 人類最初の殺人(カインとアベル)

β. 一夫多妻制の移行(シメクは全生涯を神から離れて生きた)

◆カインとシメクの罪の恐るべき影響が人類に及んだとき、「そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた」(4章2 6節後半)と記されていることは重要である。なぜなら、この時点において、**はじめて**礼拝(祈り)の共同体が存在したからである。

② 文明(6章)・雑婚による信仰心の消滅 [「神の子たち」(セツ族)と「人の娘」(カイン族)]
ネフィリムは雑婚の産物、神に対する徹底的な不信仰の時代が出現した。

③ 洪水(6～8章)

- ◆ 1年と10日におよぶ洪水期間は、取り返しのつかないまでに腐敗した地上を新しくするための神の**最初の**審判であった。ノアとその家族だけは神に忠誠であったゆえに、箱舟によって神の審判から助け出された。これはキリストによる救いの型である。

④ 出発(9章)

- ◆ ノアとその家族は箱舟から出ると主に祭壇を築き、礼拝をささげた。神はノアと契約を結び、洪水によって滅ぼすことはしないことを約束した。聖書の中ではじめて「契約」という言葉が登場する。また、その契約としての虹は神の約束のしるしである。

(6) 諸国民のはじまり(10～11章)

① ヤペテの子孫

② ハムの子孫

- ◆ ニムロデは**最初の**世界帝国の建国者となった。彼はニネベの都を建設した。11章のバベルの塔はニムロデの帝国の中心地であったと言われている。

③ セムの子孫・・・この系列からアブラハムへとつながっていく。

(7) バベルの塔の建設(11章)

- ◆ 塔の建設の意図は、神に対する反逆行為を計ることであった。しかしこの企ては神によって阻まれる。これは洪水後の神の第二の審判である。具体的には、人々の言語が混乱させられ、コミュニケーションが取れなくなった。

(8) セムの系図(11章)

- ◆ 11章10節以降は、12章からはじまるイスラエルの民(ヘブル民族)との重要なつながり目となっている。この系図によって、**[アブラハム → 父テラ → セム → ノア → セツ → アダム]** とつながっていることが確認される。

5. アブラハムからはじまる神の救いの計画

- ① 創世記12章以降は、神の救いの計画において、その担い手となるイスラエルの民の礎(いしずえ)とされた族長たちについて記されている。神は「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われた。それはアブラハム、イサク、ヤコブに特別な地位があるからである。
- ② 神の民イスラエルの礎はアブラハム、イサク、ヤコブの上に建てられている。彼らの経験は神の民がみな持つべき経験であり、それぞれ三つの異なる霊的原則を代表している。その霊的経験とは・・・

(1) アブラハムの原則

- ◆ 神が父であること。つまり、すべての源は神にあるという原則である。アブラハムの生涯はまさにこの原則を学ぶことにあった。

(2) イサクの原則

- ◆ イサクは約束の子である。彼はすべてのものを父から受け継いでいる。私たちの持っているものはすべてみな神から受けたものである。救いも、勝利も、義も、赦しも、解放もすべてである。イサクの原則は、父から受けるという原則である。

(3) ヤコブの原則

- ◆ 神は全てのものの源であり、また私たちにあるすべてのものはみな受けたものであるにもかかわらず、それを自分で得ようとする傾向がある。ヤコブの原則は、生まれつきの肉の力に頼ろうとする自我が砕かれ、聖霊の管理が必要であることを教えている。

6. アブラハムの生涯とその転機

◆神の救いのご計画において、アブラハムは神の回復のみわざの**はじまり**とされた。アブラハムの生涯には以下に見られるように五つの転機がある。しかもそれぞれに神の特別な顕現が見られる。

12章～	15章～	17章～	22章～	23章～
召命	義認	聖化	献身	晩年

(1) **召命**(12～14章)

- ① 主の顕現の背景・父テラの死、アブラハム75歳/ウル→カラン→カナン(使徒7章参照)
- ② 召命のことば「あなたは・あなたの父の家を出て、わたしが示す地に行け。」
- ③ 召命の約束
 - α. 「あなたを大いなる国民とする」(子孫繁栄の約束)
 - β. 「地上のすべてはあなたによって祝福される」(万民祝福の約束)
 - γ. 「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」(国土獲得の約束)
- ◆この約束は何度も繰り返され、イサク、ヤコブを通してより具体的になっていく。
- ◆「あなた」、および「祝福」ということばに注目しよう!
- ④ 信仰のテスト
 - α. パンのテスト(12章)
 - β. 選択のテスト(13章)
 - γ. 謙遜のテスト(14章)
- ◆12章の失敗の後に、主の介入があったことを忘れてはならない。それなしに再使命に立つことはできなかった。

(2) **義認**(15～16章)

- ① 主の顕現の背景・「恐れ」の理由(勝利の後の復讐、主の約束に対する不安)
- ② 約束の確認・「星を数えよ・あなたの子孫はこのようになる。」「この地をあなたに与える」
- ③ アブラハムの応答・「主を信じた、主はそれを彼の義と認められた。」
 - ◆契約の儀式が意味するもの・・・当時は、裂いた動物の間を当事者双方が通ることによって契約を交わした。約束を破れば動物のように引き裂かれても仕方がないという意味である。しかしこの場合、通ったのは神ご自身だけであった。アブラムは眠っていた。アブラハムに対する神の約束は、あくまでも一方的なものであり、恵みとして与えられた。アブラハムはそれを信仰をもって受け入れるだけであった。
- ④ 信仰と不信仰の葛藤(16章)
 - ◆アブラムは主を信じたが、約束を待つという点において失敗する。つまり、神の時、神の方法ではなく、人間的な画策によって神の計画を実現しようとした。この不信仰の結果、イシュマエルが産まれることになる。不信仰の実は、争い、高慢、嫉妬、無責任という悲劇を招いた。

(3) **聖化**(17～21章)

- ① 主の顕現の背景・・・不信仰による13年間の主の沈黙。アブラム99歳のとき、神は全能の神(エル・シャダイ)として現われる。
- ② 神の命令・・・「主の前を歩み、全き者であれ。」「全き者」とは、神だけを当てにして、神に撚り頼むという意味である。
- ③ 本契約・・・15章は仮契約、17章は本契約。そのしるしとして割礼が義務づけられた。
- ④ 名前の改名
 - α. アブラム(高められた父)→アブラハム(多くの国民の父)
 - β. サライ→サラ(国々の母)
- ◆夫婦とも改名したのは神が二人を夫婦一体として自覚的に新しく歩ませるため。
- ⑤ 神の友として主の前に立つアブラハム・・・祭司的務め(とりなしの祈り)18～19章。

(4) **献身**(22章)

- ① 主の顕現の背景・・・神の約束が実現し待望の末に与えられたイサクの誕生。幸せの絶頂期。

- ② 神の命令・・・「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを、全焼のいけにえとしてわたしにささげよ」
 ◆これはアブラハムにとって最大のテスト。彼にとってイサクは希望そのものであり、喜びであり最愛の対象であり、すべてであった。イサクを神にささげることは、アブラハム自身をささげることであった。アブラハムはこの信仰の試練をクリアした。

(5) **晩年**(23章)

- ① 妻サラの死・・・アブラハム136歳。生涯を共にしたサラのために嘆き悲しむ。
 ② 信仰継承の問題・イサクの妻を見つけること。条件は親族(信仰を同じくする者)の中から探すことであった。
 ③ 祝福された老年・・・「アブラハムは平安な老年を迎え、長寿を全うして息絶えて死に・・・」
 (25章8節)

7. **アブラハムに対する神の約束**

◆アブラハムに対する神の約束には三つの要素がある。



(1) **カランで語られた主のことは(12章1～3節)**

「その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、
 ①わたしが示す地へ行きなさい。②そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。③地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」
 ● [ポイント]・・・「わたしが示す地」へ行け。そこはカナン人の住む地であった。

(2)**カナンで語られた主のことは(12章7節)**

「そのころ、主がアブラムに現われ、そして①『あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。』と仰せられた。アブラムは自分に現われてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。」
 ● [ポイント]・・・「カナン人の住む地を与えるとの約束。しかもアブラハムではなくその子孫に。」

(3)**ベテルとアイの間で語られた主のことは(13章1～3節、14～17節、18節)**

「それで、アブラムは、エジプトを出て、ネゲブに上った。・・・彼はネゲブから旅を続けて、ベテルまで、すなわち、ベテルとアイの間で、以前天幕を張った所まで来た。」
 「ロトがアブラムと別れて後、主はアブラムに仰せられた。『さあ、目を上げて、①あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。②わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせる。もし人が地のちりを数えることができれば、あなたの子孫をも数えることができよう。①立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに、その地を与えるのだから。』」
 「その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた。『わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。』」
 ● [ポイント]・・・アブラハムに約束された土地とは、ベテルとアイの間にある地から、東西南北のすべて見渡す限りの広大な土地であることが明らかにされた。しかもその土地は「永久に」アブラハムとその子孫のものとなる。さらにその子孫は「地のちりのようにならせる」と約束された。
 ● [ポイント]・・・アブラハムの子孫が所有する土地の範囲は、ユーフラテス川からエジプトの方までであることが明らかにされた。

(4)**アブラムが九十九歳になったとき(17章4～8節)**

「わたしは、この、わたしの契約をあなたと結ぶ。②あなたは多くの国民の父となる。あなたの名は、もう、アブラムと呼んではならない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである。わたしは、あなたの子孫をおびただしくふやし、あなたを幾つかの国民とする。あなたから、王たちが出て来よう。・・・①わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカ

ナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。・・・」

- [ポイント]・・・ここではアブラハムの子孫がおびただしくふえて、その結果多くの国民が出てくること、また王たちが出て来るという約束。つまり、「国」あるいは「国家」が出てくるという約束がある。

(5)三人(御使い)の訪問(18章18節)

「②アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、③地のすべての国々は、彼によって祝福される。」

(6)イサクの燔祭のいけにえを主の使いが差し止めた後(22章16～18節)

「仰せられた。『・・・あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、②あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。③あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。』」

- [ポイント]・・・ここでは主がご自分に誓ってまで、約束を果たすことを確約しておられる。ここで「あなたの子孫は、敵の門を勝ち取るであろう」というのは、その子孫からひとりのメシヤが現われるという約束でもある。(ガラテヤ3章16節)

8. イサクに対する神の約束

- ◆イサクの使命は、父アブラハムから受け継いだ土地に「とどまる」ことであった。しかし、一つのところにとどまることは簡単ようで実は難しいものである。
- ◆飢饉に襲われたときにイサクはペリシテ人が住むゲラルに移動したとき主はこう言われた。「エジプトへは下るな。①わたしがあなたに示す地に住みなさい。あなたはこの地に、滞在しなさい。わたしはあなたとともにいて、あなたを祝福しよう。それはわたしが、これらの国々をすべて、あなたとあなたの子孫に与えるからだ。こうしてわたしは、あなたの父アブラハムに誓った誓いを果たすのだ。②そしてわたしは、あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与えよう。③こうして地のすべての国々は、あなたの子孫によって祝福される。これはアブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの戒めと命令とおきてとおしえを守ったからである。」(26章2～5節)
- ◆また、イサクがベエル・シェバに戻った時、主が現われて言った。「『わたしはあなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしがあなたとともにいる。②わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加えよう。わたしのしもべアブラハムのゆえに。』」(26章24節)・・・◆神への信仰のゆえに、イサクは父の約束を受け継いだ。

9. ヤコブの生涯とその転機、および神の約束

- ◆神はアブラハムに与えた約束の後継ぎとして兄のエソウではなく、弟ヤコブを選んだ。しかし神はヤコブが神のふさわしい器となるまでに実に20年の歳月をかけて取り扱われた。ヤコブには二つの大きな転機がある。

25章～28章	29章～32章	33章～50章
誕生～ベテル経験	カランでの生活～ペニエル経験	ペニエル以後～晩年

(1) 誕生からベテル経験まで(25～28章)

- ① 双子の誕生(結婚して20年後)・・・リベカに与えられた「兄が弟に仕える」という預言。
 - α. エソウ・・・毛深い。「巧みな猟師」「野の人」・・・体格も良く、スポーツマンタイプ。
 - β. ヤコブ・・・肌は滑らか。外面的には穏やか。しかしその下には底知れぬ賢さが潜む「かかと」を意味する名のとおり、ヤコブは人の足をつかみ、出し抜き、人を押しつけるような性格であった。
- ② 長子の権利をだまし取ったヤコブ
- ③ 逃亡の旅に出たヤコブ
 - ◆兄エソウの憎しみと殺意を知り、父母を離れて叔父の住むカランに向けて逃亡を図る。
 - ◆ヤコブは孤独の中ではじめて個人的に神に出会うことになる。
- ④ ベテルの経験(夢の中で見た天からの梯子と神の約束)
 - ◆アブラハムに約束された三つの内容が継承され、確認されている(28章13～14節)

「見よ。主が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。『わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。①わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。②あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、③地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。』

◆主の無条件的約束(28章15節)

「『見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。』」

◆これはアブラハムへの約束の延長であるが、アブラハムとイサクでさえこのような約束を宣言されることはなかった。マラキ書には、「わたしはヤコブを愛した。わたしはエソウを憎んだ」(1章2節)とあるが、ヤコブが神に愛されたのは、彼の行いではなく、神の一方的な選びの計画によるものであったと記されている。ローマ9章11節参照。

(2) カランの生活からペニエル経験まで(29～32章)

① カランでの生活

- α. 兄や父を欺いたヤコブが叔父ラバンから欺かれる。恋するラケルのために14年間、無報酬で働く。
- β. 叔父ラバンを出し抜いて自分の財産を築く。利害関係だけが先行。したたかなヤコブ。
- γ. 多くの子供に恵まれる・・・12人の息子たちと一人の娘。
- δ. 自分の故郷に帰るよう神から示される。

② ペニエル経験(32章)

- α. 兄エソウを恐れるヤコブ
- β. 夜明けまで格闘するヤコブ・・・ヤコブの自我があまりにも強烈だったため、神の使いはヤコブのものつがいを打った。そこが打たれるということは、神により頼まなければ生きて行けない存在となったことを意味する。自分の名が「ヤコブです!」と告白したとき、彼の名はイスラエルに変えられた。ヤコブからイスラエルへ。この経験をしたヤコブは、その所の名をペニエルと呼んだ。ペニエルとは『私は顔と顔とを会わせて神を見たのに、私の命は救われた』という意味である。自分の真相が神の前に引き出され、その醜い姿が照らし出されたにもかかわらず、こんな自分を愛し続けて下さる恵みに私は救われたという意味である。
- γ. 自分の弱さを自覚したとき、真の霊的勝利(平安)が来る。「弱いときにこそ、私は強い」というパウロの告白。

(3) ペニエル経験後-砕かれた者の幸い(33～50章)

① エソウとの和解

◆ヤコブは兄を恐れていたが、エソウはヤコブを快く迎え入れた。問題はヤコブ自身にあった。ヤコブは「私はあなたの顔を、神の御顔を見るように見えています、」(33章10節)と言った。これは兄へのへつらいではなく、エソウとの和解において、神の助けを実感したこと率直な表現である。

② 神の恵みの明確な自覚

◆兄に贈り物をするとき、「神が私を恵んでくださったので、私はたくさん持っています」とヤコブはあかしした。

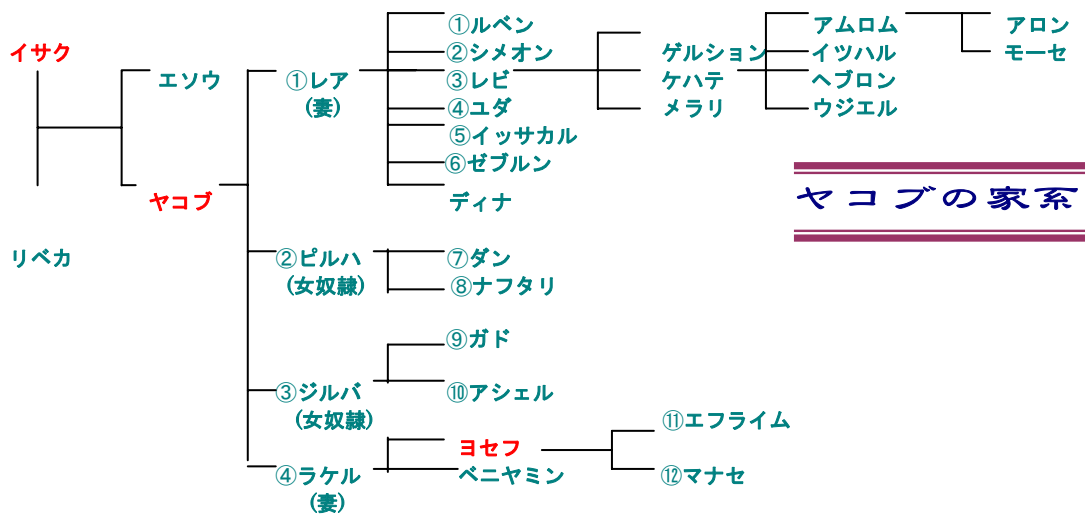
③ 明確に神にゆだねる生き方へ

◆ペニエル経験以後、ヤコブの生涯にはいろいろなことが起こった。不幸な事件と悲惨な結果。最愛のラケルの死・・・など。以前のヤコブであるならば、知恵をしばり、画策を尽くして対抗したに違いない。しかし、ペニエル経験後、「黙っていた」とか「ただ聞いていた」というように、神にゆだねた沈黙と忍従の態度が目立つ。自我に死んだ姿をここに見る。「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。」(詩篇34篇18節)

(4) アブラハムへの神の約束の継承と確認

◆ヤコブにはラケルとレアの二人の妻と合計12名の息子がいた。彼が神が約束されたように、ベテルに戻ってきた時、主は彼を祝福された。
「わたしは全能の神である。②生めよ。ふえよ。一つの国民、諸国の民のつどいが、あなたから出て、王たちがあなたの腰から出る。①わたしはアブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与え、あな

たの後の子孫にもその地を与えよう。」(35章11~12節)
 ◆こうしてヤコブの生涯は、神のすばらしい約束が与えられるところで終わる。



10. ヨセフの生涯と出エジプト記との関わり

(1) アブラハムに対してなされた神の預言・創世記15章

「そこで、アブラムに仰せがあった。『あなたはこの事をよく知っていない。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。そして、四代目の者たちが、ここに戻って来る。・・・』」(15章13~16節)

- ①上記の預言は、神の民イスラエルがエジプトから解放されることを預言している。このアブラハムに対してなされた預言とアブラハム、イサク、ヤコブに対する約束がどのようにして実現するのか。その鍵を握っているのがヨセフの生涯である。
- ②ヤコブは息子のヨセフによって、家族ごとエジプトに下っていくが、それは、先に主がアブラムに予告されたように、エジプトで増えて、約束の地に戻ってくるためであった。

(2) ヨセフの生涯にみる特徴と歴史観

- ①兄たちから嫉妬と憎悪をかったヨセフは、奴隷商人に売り渡されて、エジプトのパロの役人に買い取られた。

「主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。」

(39章2~3節)

◆「主がともにおられる」・・・これこそヨセフの生涯を特徴づけるものである。

- ②エジプトの治世者となったヨセフは自分の兄弟たちに再会する。そのとき彼はこう言った。「ヨセフは言った。「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。・・・だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。」(45章4~8節)

◆ここには、隠れた歴史支配者としての神への信仰によって再解釈された歴史観がある。この歴史観は創世記50章20節でヨセフの口を通して反復されている。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。」ということばを通して、隠れた歴史支配者は人の悪意をも変容し、逆用しつつ、その万民祝福の計画を遂行する主なる神として証しされている。

出エジプト記

1. 出エジプト記の主題、および構造

(1) 出エジプト記と創世記との連続性

アブラハムが神から受けた約束は、出エジプト記において受け継がれ、具体的に展開する。

- ① 「あなたを大いなる国民とする」(子孫繁栄の約束)
ヤコブ一族のエジプト移住によって数の上では驚異的に増加する(1章)。
- ② 「地上の全てはあなたによって祝福される」(万民祝福の約束)
神との契約によって宝の民、特選の民という立場の賦与(19章5節)。
- ③ 「あなたの子孫に、カナンの地を与える」(国土獲得の約束)
出エジプトはカナンの地を与えるため、と再確認される(3、6章)。

(2) 主 題 「神の民の成立」・・・どのようにしてイスラエルが神の民となったか。すなわち、「しもべたる神の民がいかにして成立したか」が記されている。

(3) 鍵 語

- ① 「贖い」 ② 「仕える」 ③ 「契約」 ④ 「内住」

(4) 出エジプト記の構造

贖い(1～18章)	契約(19～24章)	幕屋建設(25～40章)
〔救出— 贖い〕 どのようにしてイスラエルが神の民となったか。その出来事。	〔契約— 律法〕 神とイスラエルが合意のもとに結んだ新しい契約とは何か。	〔内住— 神の臨在〕 幕屋建造の真の意図は何か。
<ul style="list-style-type: none"> ● 神の民として確立するための神の出来事 ① 過 越 (12章) ② 紅海徒渉 (14章) ③ 荒野経験 (16章) ④ 契 約 (19章) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 契約とそれを支える律法の関係 ● 契約における三つの特権 ① 神の宝 ② 祭司の王国 ③ 聖なる国民 ● 愛の奴隷(21章) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 幕屋建造の意図(目的) ● 幕屋の構造 ① 門 ② 大庭 ③ 聖所 ④ 至聖所

(5) 歴史的背景・・・「ヨセフを知らない新しい王」(1章1節)とは？

- ① エジプト人は非常に早くから自国の歴史を書き残しており、第一王朝から第三十王朝に至る各王朝の歴史の王の名前を一人も抜かさずにたどっていくことができる。その間の様々な出来事を記している。ところが、紀元前1770年頃から1580年頃の期間については、記録の面から言えば、まことに空白の時代である。この期間は、北方から「ヒクソス」(外国の支配者)が侵入し、エジプト北部を占領し、南部はエジプトが支配する時代が第十四王朝まで続いた。その後、15、16王朝になるとヒクソスの統一支配によってエジプトは王座を奪われてしまった。17王朝で再び南がエジプト人の王の手に戻され、18王朝に至ってようやくエジプト全土を奪い返し、ヒクソスを追い出すことに成功する。
- ② 「ヒクソス」はセム系の民族で、イスラエルとはいわば同系統、創世記のヨセフ物語に登場するパロは、このヒクソスの王であったと考えられる。親戚関係の民族であったゆえに、ヤコブ一族のエジプト移住も優遇された。ところが、「ヨセフの知らない新しい王」がヒクソスを追放して国を奪回したエジプト人の王朝であるとすれば、イスラエル民族に対する酷使、虐待政策はよく理解できる。

2. 出エジプト記の重要なキー・ワード

(1) 「贖い」という用語

- ◆ 「贖い」という言葉は三つある。一つは「**ガーアル**」、二つめは「**パーダー**」、そして「**カーファル**」。その中で最も重要なのは「**ガーアル**」である。その意味は以下の通りである。

- ① 神がイスラエルをエジプトから救出した行為については、もっぱらこの語が用いられている(6章6節、15章13節)。旧約聖書でこの語がよく用いられる書は、ルツ記とイザヤ書である。これらの書では動詞ガーアルから変化して出来た名詞「ゴーエール」が用いられている。その意味するところは、たとえば、ルツとナオミが落ちぶれて土地を手放してしまうが、自分ではそれを買い戻す力がない。そのときにその人に代って、血縁の人が、身内のだれかが買い戻してやる。その人がゴーエールである。
- ② 出エジプト記で用いられるガーアルは、神と親しい交わりの中に歩んだアブラハム、イサク、ヤコブの子孫が落ちぶれて奴隷となっていたのをあがなったときに用いられている。それは彼らがひとたび失った権利を、再び取り戻すことまでも含んでいる。これが出エジプト記であり、「あがない」の出来事なのである。つまり、贖いには「救い出す」ことと「権利回復」という二つの面があることを心に留めよう。
- ③ 奴隷の民から神の特選の民になること。落ちぶれた境遇から「特権と光栄の身分に移された」こと。これこそが「贖い」であって、「救出」は贖いの消極面、「復権」は贖いの積極面と言える。贖いの消極面だけで腰を下ろし、積極面を忘れるとき、信仰生活がストップすることがある。

(2)「贖いの目的」・・・神に仕える民(神を礼拝する民)を創造すること(3章12節)

- ① 「仕える」(アーバド)という言葉・・・「仕える」ということばは礼拝用語である。
 - i. 使用頻度・・・モーセとアロンがエジプトの王パロのもとに行き行って談判するたびに繰り返して出てくる。⇒「主はこう仰せられる。『わたしの民を行かせ、彼らを私に仕えさせよ』」
 - ii. 名詞「エベド」はしもべ、奴隷という意味。しもべは聖書において理想的な人間像である。イスラエルで最もすばらしい人は「仕えることのできる人」である、神に仕える人こそ最も栄誉ある人と言われる。「神のしもべ」こそ、聖書における神の民として最高の肩書きである。アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、エリヤ、そしてパウロは神から「神のしもべ」と呼ばれた。
 - iii. イザヤ53章では、メシヤがしもべの姿をとって来られることを預言している。ピリピ2章には、しもべのかたちをとって私たちの救いを全うしてくださったイエス・キリストが賛美されている。そのイエス・キリストが「あなたがたの間で上に立つ者は、人に仕える者でありなさい」(マルコ10章44節)と語られている。
 - iv. ローマ書6章15～23節参照。罪の奴隷から義の奴隷(従順の奴隷)へ。サタンの奴隷から神の奴隷へ。あなたの主人はすでに取り替えられている！
出エジプト記21章1～6節参照。
- ② 「仕える」こと(礼拝すること)ことを妨害するパロの妥協案
 - ◆神の民は神に仕えることであってこそ本物である。それゆえパロは必死になって妨害する。
 - i. [妥協案その一] 8章25～28節「行ってもよいが、あまり遠くへ行くな」
 - ii. [妥協案その二] 10章8～11節「壮年の男だけ行け」
 - iii. [妥協案その三] 10章24～26節「行け。主に仕えよ。ただ羊と牛とは置いていけ」

3. 神の民の成立のために、神がなされた四つの出来事

- ◆イスラエルが神の民としての身分が与えられ、神の「しもべ」たることに徹底するのを助ける四つの経験が出エジプト記に記されている。それは「過越」「紅海徒渉」「荒野経験」「契約」の出来事である。

(1) [過越]

- ① 10番目の災いがエジプト全土を襲う夜、イスラエルの人々は神の示しによって各自、戸口のかもとに柱に小羊の血を塗った。その血によって神のさばきは免れた。これは「血による区別」である。キリストの血潮だけが、救いと滅びを分ける。
- ② 小羊の血によってイスラエルの民は買い取られたのである。つまり小羊の血(いのち)という代価によって買い取られて神の所有とされた。

(2) 紅海徒渉

- ① 追い詰められ、前後左右いずれも逃れる道はなく、絶体絶命の危機的状況の中で、ただ神に信頼することによってのみ道は開かれた。このような経験を通った人はそのあとの信仰がはっきりしている。自分の過去の罪の意識によって、鋭く追い詰められて、キリストの十字架以外に逃れる道がないことを経験することである。ここを通ると後戻りは出来なくなる。
- ② 紅海徒渉の経験は奴隷の家との断絶を意味する。それはモーセとともになることによってこの紅海は越えられた。バプテスマの経験とはまさにこのことである。洗礼とは「死」である。イエスが十字架で死んでくださったときにキリストにあって私たちも死んだのである。ローマ書6章参照。

(3) 荒野経験

- ① 荒野の経験は「人はパンのみによって生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつのことばによる」ということを経験する場である。神のことばに絶対的に信頼する者に神は責任をもってくださる。マタイ6章3節参照。
- ② だれがこの私を生かしてくるのが問われる経験。生活のかかっている観念だけの信仰では力がない。神の民は神のことばに従って生きる訓練が強いられる。

(4) 契約

- ① シナイ山で結んだ契約によって神の民としての正式な身分が決定する。それは成人した男子と女子が結婚をして夫と妻という夫婦という関係を結ぶように、神とイスラエルはここで結婚関係を結んだのである。奉仕という観点からいえば、主としもべの関係の締結とも言える。
- ② 契約はあくまでも双方の合意によってなされ、決して一方的な強制によるものではない。「私は喜んであなたのしもべとして仕えさせていただきます」という関係である。

4. 神と神の民イスラエルが結んだ契約

(1) 個人から民へ

- ① 旧約聖書全体の重要な思想は「契約」という概念である。旧約、新約の「約」とは契約を意味している。聖書においては人と人が結ぶ契約も見られるが、聖書全体を特色づける契約は神と人(民)との間に結ばれた契約である。その契約関係とは「主がイスラエルの神となり、イスラエルは主の民となった」ということである。
- ② すでに神はアブラハム、イサク、ヤコブと個人的に契約を結ばれたが、ここに至ってはじめて、民を相手として契約関係に入られたのである。この契約はシナイ契約と呼ばれ、神の恵みにもとづいている。出エジプト19章4節、申命記32章11節参照。旧約の歴史の危機的な状況において更新されていく。

(2) 契約における三つの特権(19章5～6節)

◆イスラエルがエジプトの奴隷状態から救い出され、シナイ山において神の「宝」、「祭司の王国」、「聖なる国民」とされて、生ける神との独自の契約関係を結んだことは画期的な出来事だったのである。

- ① **《神の宝》**・イスラエルはすべての国々の中にあって「神の宝」となる。神にとって大切な財産、特別な宝。神と特別な関係と価値を有するものとなる。
- ② **《祭司の王国》**とされるとは、イスラエルの民が神と他の民族との間の仲介者となり、全世界にいる他の民族を神に導くためのとりなしの祈り手とされた。ペテロ第一2章9節。祭司としての使命。
- ③ **《聖なる国民》**とされるとは、罪を犯さなくなるということではなく、神のために特別にきよめ分たれた国民にされることを意味している。実際に、生ける神の声を聞くという特権にあずかった民族は、世界でただイスラエルのみであった。

◆これらの三つの特権は互に深いつながりがあり、また現代のキリスト者に適用される。

(3) 契約の条件(19章5節)

◆契約締結の条件は神の御声に聞き従うことである。しかしそれは強制ではなく、合意(同意)に基づくものである。民は「主が仰せられたことを、みな行なう」と約束した。しかしこの時、それがいかに難しいことであるか、少しも理解してはいなかった。ペテロの自信「私はあなたを知らないなどと決して申しません」(マタイ26章35節)のように。

(4) 契約の内容・・・律法の賦与(20章1～17節)

- ① 律法の賦与の意義・・・イスラエルが神の民として正しい基準を持つためである。
- ② 旧約律法の三つの種類
 - i. 道徳律法(モーセの十戒)・・・十戒は二枚の石の板に書かれ、幕屋の中の契約の箱の中に納められる。イスラエルが旅をするときは、神の箱が先頭になって進んだ。それは神の道徳律法がすべての中心であることを、このことを通して神がお示しになった。すべての律法はこの十戒を中心としている。
 - ii. 祭儀律法・・・礼拝に関する規定が記されている。
 - iii. 社会律法・・・民事裁判等の規定が記されている。
- 道徳律法は永遠に変わらない。祭儀律法と社会律法に関してはキリストの贖いによって新約時代に廃棄された。
- ③ 十戒の構造と内容

序 文	<ul style="list-style-type: none"> ●【神の恩恵のみわざの宣言】 「わたしは、あなたを・・・した、あなたの神、主である。」 ◆神の全能の力、権威、愛、恵みによる先行的恩寵が宣言されている。
前 半	<ul style="list-style-type: none"> ●【神に対する義務と責任】 「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」 i. 「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」(3節) ii. 「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」(4～6節) iii. 「あなたの神、主の御名をみだりに唱えてはならない。」(7節) iv. 「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」(8節)
後 半	<ul style="list-style-type: none"> ●【人間に対する義務と責任】 「あなたの隣人を自分自身のように愛せよ。」 ◆神を愛することは、隣人を愛することと同義であり、車の両輪の関係である。 v. 「あなたの父と母を敬え。」(12節) vi. 「殺してはならない。」(13節) vii. 「姦淫してはならない。」(14節) viii. 「盗んではならない。」(15節) ix. 「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。」(16節) x. 「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。」(17節)

- ④ 律法(十戒)が指向しているもの・・・神が十戒を与えられたのは、神が人に要求する標準を提示すると同時に、私たちが律法を守ることのできない罪人であることを示すためである。それゆえ私たちには救い主が必要なのである。律法はキリストに導く養育係なのである。

5. 幕屋建造とその目的(25章～40章)

◆32～34章を除き、実に13章をも費やして幕屋建造の指示と、そこに奉仕する祭司についての記述されている。それほどに幕屋は神と民にとって重要であった。25～31章は幕屋に関する神の指示が記され、35～40章は実際に指示どおり造られたという報告の記述である。幕屋が完成したとき、「雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。」(40章34節)とある。

(1) 幕屋の名称

- ①聖所(出25:8) ②主の幕屋(レビ17:4) ③あかしの幕屋(出38:21)
- ④会見の幕屋(出27:21) ⑤会見の天幕である幕屋(出39:32) ⑥あかしの天幕(民9:15)

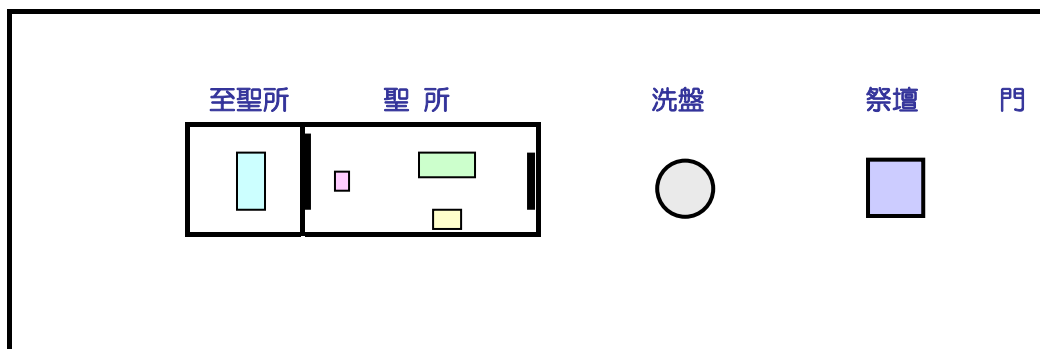
⑦主の聖所(民 19:20) ⑧神の宮(士 18:31) ⑨主の家(1サム 1:7,9/主の宮とも訳す)

(2) 幕屋建造の目的

◆「彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼ら中に住む」(出エジプト 25章8節)

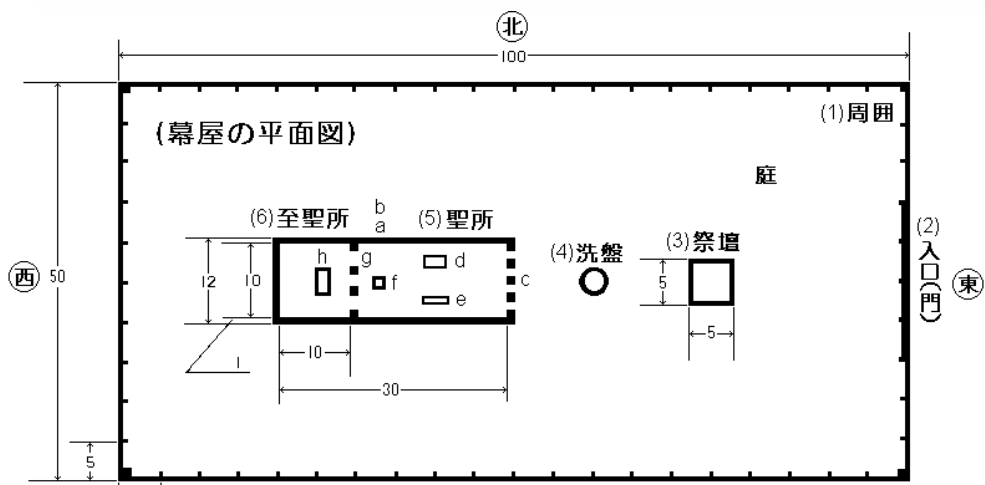
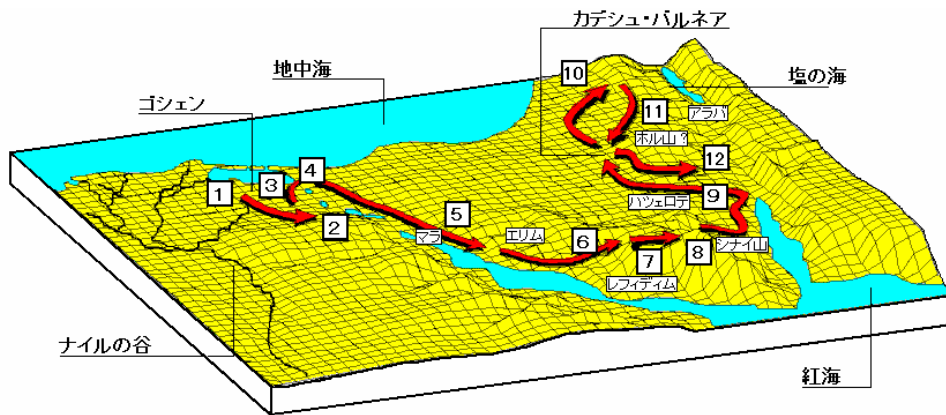
つまり幕屋は、主なる神がイスラエルの民の中に住む(内住)所であり、会見の場であり、神の臨在を示す場所であった。他の箇所も参照。29章45、46節。幕屋の意味するところは、他にも神を礼拝する場所であること。また天にある本物の聖所、すなわち天国の地上における模型(影)であること(ヘブル9章23～24節)。また、イエス・キリストご自身の型であること。幕屋内の多くの器具もキリストの型である。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた(-幕屋を張られた)。」(ヨハネ1章14節)

(3) 幕屋の構造・・・《是非、記憶しよう!》



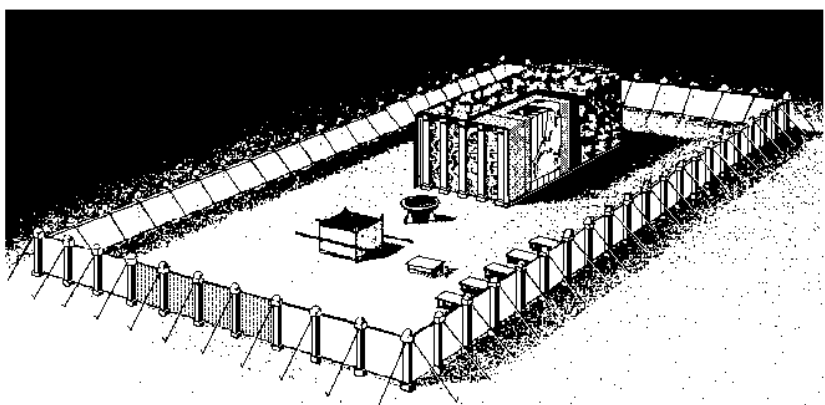
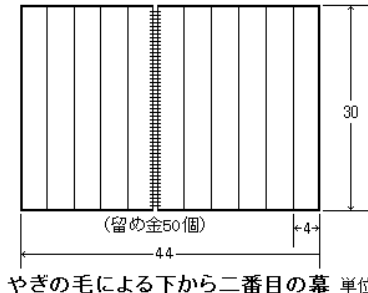
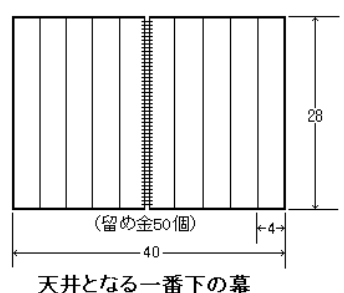
- ① [門] 東に一箇所あるのみ。礼拝する者はだれでもこの門を通らなければならなかった。神の唯一の門(ヨハネ10章9節)。
- ② [大庭]
 - i. 祭壇 門を入った前庭の中央にはいけにえの動物を焼くための祭壇があった。ここでは、毎日絶やすことなく、朝と夕に若い雄牛のいけにえがささげられた。また礼拝する人々はこの祭壇に置くいけにえを持って来なければならなかった。
 - ii. 洗盤 幕屋で仕える祭司たちが奉仕する前に身をきよめるために、ここで水を浴び、手を洗った。
- ③ [聖所]
 - i. 聖所の入り口の幕 . . . 祭司たちは毎日聖所の入り口の幕を通して、聖所での務めをした。一般の人が中に入ることはできなかった。⇒ヘブル10章19節。
 - ii. パンの机 イスラエルの12部族を表わす12のパンが、神の恵みに対する感謝として、また神こそ民のすべての必要を備えてくれるという信仰のあかしとして、絶えず神にささげられた。⇒ヨハネ6章35,48節。
 - iii. 燭台 純金でできた豪華な燭台。窓のなかった聖所の明かりのすべてをこの燭台にたよっていた。しかもその燃料となるオリーブ油は上質なものが用いられた。⇒ヨハネ1章9節、8章12節。油は聖霊を象徴する。
 - iv. 香壇 聖所の中は、毎朝、毎晩、かおりの高い香がたかれた。⇒とりなしの祈りヨハネ17章9節、ヘブル4章14～16節、1ヨハネ2章1節。
 - v. 垂れ幕 聖所と至聖所とを仕切っている隔ての垂れ幕。そこには神の臨在の象徴であるケルビムが織り出されていた(創世記3章24節)。垂れ幕を通ることなしに至聖所に入ることはできなかった。⇒神と人との隔てが裂かれた。マタイ27章51節、ヘブル6章19～20節、同10章20節。
- ④ [至聖所]
 - i. 契約の箱 神がまず造るように命じたのはこの箱であった。この箱の中には十戒が刻まれた石の板、マナの入った金のつぼ、芽を出したアロンの杖である。この契約の箱こそ、イスラエルの中心をなすものであった。
 - ii. 贖いのふた 契約の箱のふたの両端には二つの金のケルビムが置かれ、その翼は広げられてふたを覆っていた。年に一度だけ、大祭司のみが至聖所に入り、ふたに血を塗ってイスラエルの民の罪の贖いをなした。ふたの上に主の臨在があり、神はそこから語りかけられた。⇒血による臨在経験 ヘブル9章12節、同10章19節参照。

【資料】



<聖所> a. 壁 d. 机
 b. 覆い e. 燭台
 c. 入口 f. 香の壇
 <至聖所> g. 仕切りの垂れ幕
 h. 契約の箱

単位：キュビト



レビ記

1. レビ記の主題、および構造

(1) 出エジプト記の主題とレビ記の主題との関係

- ① 出エジプト記の主題は「**神の民の成立**」であった。そのために神はイスラエルの民を〔贖い〕、〔契約〕を結び、神ご自身がイスラエルの真ん中に〔内住〕されるための幕屋を建造することを啓示した。この内住こそ神の民の奥義である。
- ② レビ記は、その幕屋に内住される神による「**神の民の聖別**」を主題としている。つまり、神に贖われた民が、いかにして神の民としてふさわしい存在となりうるかを規定する。具体的には、聖なる神に近づき、交わり、神に受け入れられる礼拝をするための手段と、神の民がその日常生活において、聖なるものと汚れたものとを峻別して歩む生き方が規定されている。レビ記は、神がモーセを会見の天幕に呼び寄せて一方的に語っている記録である。

(2) レビ記の鍵語

「聖」「聖別」(11章44、45節、19章2節、20章7、26節、22章32節)

① 「聖」の概念

◆聖は神の本質そのものを表わす。神が聖であるということは、神が本質的にすべての被造物とは全く異なる存在であることを表わしている。それはまた、ことばの概念や理解を超越したもの、常ならざるもの、非合理的、非日常的な内実を有した表現しきれない神秘である。その神が「あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。」(19章2節)と命じている。それは当然、この世とは異なったあり方、分離された、排他的な、独自の生活様式が要求される。

◆レビ記においては、「聖い」という言葉、あるいはそのことばから派生した言葉が実に150回も記されている。主はイスラエルの民にあらゆることにおいて、聖くあることを求められた。

② 「聖別」の概念

◆聖を表わすヘブライ語のカドシュは、本来、切り離し、区別され、取り分けておくという意味である。つまり、分離することを意味する。神と関わるものはすべて他のものと異なっていなければならない。混同されてはならなかった。レビ記は「聖なるものと俗なるもの、また、汚れたものときよいものを区別する」ための基準を定めている。また、聖なる神と関係をもつすべてのもの(人、物、場所、日、時・・等)が、適切な儀式(祭儀律法)を執行することによって、神に献げられたもの、神だけのもの、神のためにのみ用いられるふさわしいものとして区別されたのである。

●聖別の概念は少なくとも、以下の三つの意味を内容としている。

神への所属を表わす関係概念	「聖なる国民」 (出19章6節、1ペテロ2章9節、1コリント1章2節)
神の道具としての働きをする概念	「聖められたもの」(IIテモテ2章19～21節)
神の聖にふさわしい倫理的な歩み	「自分を清くする」(Iヨハネ3章3節)

(3) 「聖なるもの」に対する鋭敏な感覚の訓練としてのレビ記

- ① 本来「聖なるもの」への鋭敏な感覚が欠落している人間に、この感覚を訓練することは至難な課題である。「聖なるもの」に対する感覚とは、聖なるものへの畏れに他ならない。この「畏れ」の感覚と対立するのが「狎れ」である。この「狎れ」が神の民として致命的で

あることを銘記させる出来事が10章にみられる。

- ②大祭司アロンの子、ナダブとアビブは異火をささげたことによってさばかれ死に至った。なぜなら、聖なる目的のために用いられる火は祭壇の火から得なければならなかったからである。しかしアロンの息子たちはそれに従わなかった。聖なる祭司を任じられているアロンの子たちは「聖なるもの」に対しては、その幼児から関心をもたされていたはずである。にもかかわらず、厳禁されていた異火をささげた行為は、まさに「聖なるもの」に対する「狎れ」を暴露する出来事であった。この時、モーセはアロンに主が仰せられたことを語った。「わたしに近づく者によって、わたしは自分の聖を現わし、すべての民の前でわたしは栄光を現わす」と。それゆえアロンは黙っていたとある。祭司エリの二人の息子(ホフニ、ピネハス)は狎れの罪により、裁かれて死んだ。
- ③「狎れ」の恐ろしさは、「聖なるもの」と「汚れたもの」との識別力を失わせることにある。会見の幕屋に入るとき、ぶどう酒と濃い酒を飲む事を禁じる理由もまた「これはあなたがたが聖なるものと俗なるもの、汚れたものときよいものとを区別することができるため」と繰り返し強調されていることに注目しよう(10章8節以下、11章全体(特に、11章44～47節等)。
- ④「聖なるもの」の感覚を培うために神は贖いを求められる。16章20節以下にはイスラエルの民全体のための大贖罪日が規定されているが、その中に「アロンは生きているやぎの頭に両手を置き、イスラエル人のすべての咎と、すべてのそのおむきを、どんな罪であっても、これを全部その上に告白し、これらをそのやぎの頭の上に置き、係りの者の手でこれを荒野に放つ」ことが記されている。この規定を通して、聖なる神とともに歩むために選ばれた者の罪や咎は決して消されるものではなく、それは必ず「代わってそれを負う」ものが要求されることを銘記するものである。

(4) レビ記の構造

聖なる神に近づく道 (1～10章)		聖なる神とともに歩む者 (11～27章)	
内容	(1)神への供え物について(1～7章) (2)供え物をささげる祭司の聖別 (8～10章)	内容	(1)民の日常生活の聖と俗の峻別 —食物、身体、衣服、家、性に関する聖め— (2)隣人愛、安息日、過越祭、安息年、ヨベルの年
特徴	(1)道徳的に無関係の規定が扱われる (2)礼拝に関すること (3)儀式的、身体的な汚れを扱っている (4)民の罪を洗い流すことに関する (5)犠牲によって神に至る道が示される	特徴	(1)道徳に關係する規定が扱われている (2)実生活に関すること (3)道徳的、靈的汚れを扱っている (4)民の聖い生き方に関する (5)聖別によって神と共に歩むことが示される

2. 聖なる神に近づく道

◆幕屋において神に近づくためには、祭司がいけにえをささげる必要があった。

(1) 神を礼拝するために5つのささげもの

- ① 全焼のいけにえ(燔祭)・・・1章 [任意のささげもの、自発的、香ばしい香り]
- ② 穀物のささげもの(素祭)・・・2章 [任意のささげもの、自発的、香ばしい香り]
- ③ 和解のいけにえ(酬恩祭)・・・3章 [任意のささげもの、自発的、香ばしい香り]
- ④ 罪のためのいけにえ(罪祭)・・・4章 [義務的なささげもの、香ばしくない香り]
- ⑤ 罪過のためのいけにえ(愆祭)・・・5章 [義務的なささげもの、香ばしくない香り]

◆これらのいけにえは全体がひとつとなって、贖いのいけにえとしてのキリストご自身の5つの異なる観点を【ひな型】として示している。

①【全焼のいけにえ】

◆御父の最高の喜びのために、キリストはご自身を完全にささげられた。ベツレヘムの馬小屋からカルバリの十字架まで、地上における主の道は、御父の意志への心からの絶対的な服従であった。キリストの生涯を要約する聖句は次の通りである。「わが神よ。わたしはみこころを行なうことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります。」(詩篇40篇7、8節、ヘブル10章7～9節)。罪なきキリストがご自身を神のみこころのために完全にささげられたのである。

②【穀物のささげもの】

◆穀物は人の労苦の結実である。したがってこのささげものはキリストご自身が完全な人間性を備えておられたことのひな型である。また、人間に仕えるためにご自身をささげたキリストのひな型でもある。

③【和解のいけにえ】

◆このいけにえによって神との交わりを楽しむことができた。神にささげた部分は脂肪の部分であり、残りの部分はささげた人のものであった。このいけにえは、神と人との和解、結びの帯としてのご自身をささげたキリストのひな型である。キリストのいけにえによって、神はなだめられ、人は神との和解が与えられ、神との平和が成立した。

④【罪のいけにえ】

◆このいけにえは、意識的に犯した罪ではなく、無意識に犯した罪の赦しのためのものであった。キリストは私たちの代わりに罪(原罪)となられたひな型である。

⑤【罪過のいけにえ】

◆このいけにえは、自覚的な罪、行為の罪(複数)の赦しのためのいけにえである。キリストは私たちの犯した罪のために身代わりとなられたひな型である。

- ②を除くすべてのいけにえは、みな血を注ぎ出すものである。血はいのちそのものであるゆえに価値がある。血を注ぎ出すいけにえによって、神から隔絶した人間が、唯一、神に近づくことが赦されたのである。
- レピ記全体は、新約聖書の「ヨハネの手紙第一1章7節の偉大な真理を明らかにする最高の例証である。」(バクスター)。
- レピ記を理解するならば、新約聖書のヘブル人への手紙を理解することができる。

(2) ささげものの順序

- ①出エジプト記の幕屋の建造において、神は至聖所の契約の箱から語れたように、レピ記のいけにえにおいても同様の順序が見られる。つまり私たち人間が出発点とするところを神は最終点としている。
- ②私たちがはじめて自分の罪を自覚し、罪人として神のものに(十字架のもとに)にやってくる時、最初に必要なのは罪過に対する赦しである。しかしその赦しの喜びも、自分の性質の中にある罪(原罪)に気づくまでは、罪の赦しの恵みを真に喜ぶことはできない。キリストは私たちの犯した罪の身代わりとして死なただけではない。私たちの代りに罪となられたのである。個々の罪もまたその根である原罪も十字架において取り扱われている。このことを悟るとき、私たちは神とのすばらしい平和の関係に入ることができる。そこには神に完全に受け入れられている自分を見出す。そして私たちはますます神のものとして自分を神に献げることができるのである。
- ③神に喜ばれる礼拝とは、「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげ」ることである。(ローマ12章1節) しかもこれはあくまでも自発的でなければならない。礼拝とは、ささげることであり、献身なき礼拝を神は受け入れることはできないのである。

(3) キリストによる永遠の贖い

◆レビ記における祭儀律法のささげものによっては、「礼拝する者の良心を完全にすることはできなかつた」(ヘブル9章9、10節)。しかしキリストが私たちの「罪のために一つの永遠のいけにえをささげて」くださったことにより、「私たちは聖なるものとされている」(ヘブル10章10節)。それゆえ、今日のキリスト者は、神に喜ばれる「霊のいけにえ」(1ペテロ2章5節)、すなわち「賛美のいけにえ」(ヘブル13章15節)、「喜びのいけにえ」「感謝のいけにえ」「従順のいけにえ」、そして「自分のからだ」を生きた供え物として、自発的に、ささげるよう求められている。

3. レビ記におけるトピック

(1) 安息年の意味(25章)

◆6年間、畑には種を蒔き、収穫をする。しかし7年目には種を蒔くことはせず、ぶどうの枝を刈り取ることをしてはならない。なぜなら土地は主のものであり、地も主の安息を守らなければならないからである。その年に生える草や実りが何であれ、だれでも(貧しい者から獣に至るまで)自由に食べることができるよう主が自身の土地として提供される。ここに見事な社会福祉の理念が見られる。

(2) ヨベルの年の意味(25章)と救済史的理解

◆安息の年を7度数えた50年目は、ヨベルの年として聖別されなければならない。ヨベルの年は奴隷は無条件に釈放され、貧しさのために売っていた土地は、無条件に元の所有者に返還される。いわば自由の回復の年として守られるべき規定であった。

- ① 社会機構において実施(レビ25章8～16節)
- ② メシヤ来臨の待望(イザヤ61章1節「捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を・・・」)
- ③ イエス・キリストにおいて成就(ルカ4章17～21節)・・・この箇所はルカ神学の鍵である。

◆しかしイスラエルの歴史を見ると実際はそうではなかつたようである。神が神の民に要求する社会の正義と公正は守られなかつたのである。



—荒野に再建された幕屋—

民数記

1. 民数記の主題、および構造

(1) これまでの各書の主題の整理

- ① 創世記の主題は「**神の民の開始**」であった。墮落した人間(世界)の救いを担う神の民がどのようにして始まったかを扱っている。
- ② 出エジプト記の主題は「**神の民の成立**」。イスラエルの民がエジプトの圧制から救い出され(贖われて)、神と合意により契約を交わした。また、神は幕屋を通して神ご自身がイスラエルの民の中に内住することにより、神の民が成立したことを記している。
- ③ レビ記の主題は「**神の民の聖別**」である。神に選ばれた民が聖なるものに対していかに鋭敏な感覚を身につけるべきかが記されている。

(2) 民数記の主題

- ① 民数記は神の民のカナン侵攻の失敗と、それに続く40年にもおよぶ荒野放浪の経験の記録である。そこでは、神の民が様々な状況判断を必要とする中でいかに神を畏れて歩まなければならないかを教えている。したがって民数記の主題を「**神の民の訓練**」としたい。民数記には神の民が神の民としてふさわしく整えられるための教訓的な育成プログラムに満ちている。
- ② 「訓練の重要性」へブル書12章3～12節。N・R・エドマン著『人生の訓練』(いのちのことば社)には教えられる所が多い。

(3) 民数記の歴史的範囲(出エジプト記から申命記までの時間的区分)

◆イスラエルの民が出エジプトした次の年から約束の地に入るまでの39年間の記録が書かれている。

<1年> 第1年第1月	<1ヶ月>	<39年間> 第2年第2月 第40年目5月	<3ヶ月> 第40年目1月
出エジプト記 ▶出エジプト脱出 ▶契約締結 ▶幕屋建設	レビ記	民数記 ▶第一回人口調査 ▶シナイの荒野を出発 ー荒野放浪ー ▶モアブ到着 ▶第二回人口調査	申命記 ▶モーセの決別説教
紅海～シナイの荒野		パランの荒野 荒野放浪 モアブ草原	

(4) 民数記の構造と内容の概略

旅の準備	荒野の放浪	カナンに向かって
1～12章	13～20章	21～36章
<ul style="list-style-type: none"> ●最初の人口調査 ●部族ごとの宿営配置 ●レビ人の奉仕分担 ●秩序立った行進 等 	<ul style="list-style-type: none"> ●約束の地カナンの偵察 ●不信仰・・・ 40年の放浪を余儀なくされたその結果、ヨシュアとカレブを除き、世代がすべて変わった。 ●権威に対する反逆・ アロンとミリアム、コラの子ら ●アロンの死(20:28-29) 	<ul style="list-style-type: none"> ●バラムの祝福(21:~24:) ●ベオル事件(25:) ●再度の人口調査(26:) ●後継者ヨシュアの任命(27:18)

(5) 民数記と新約聖書

- ① Ⅰコリント書10章1節～10節・・・「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、・・・私たちの教訓とするためです。」・・・パウロは荒野の経験とコリントの教会の状態を重ね合わせている。
- ② ヘブル書3章7節～4章13節・・・不従順によって約束の地に入ることを阻まれたことを、キリスト者が天国の安息に入れなくなる罪と恐れと重ね合わせている。
- ③ ユダ書・・・コラの反乱、パラムの失敗を用いて教会を取り囲む危険について警告している。
- ④ ヨハネ3章14節～15節・・・キリストの十字架の型として上げられた青銅の蛇が引用されている。

2. 人口調査(第一回目・・・1章、 第二回目・・・26章)

(1) 人口調査の目的・・・なぜ人口調査をする必要があったのか？

- ① 神の民、12部族の奉仕の責任分担および宿営の仕方を規定するため
- ② 約束の地に向けて、神を中心とした秩序をもって行動するため。
- ③ 約束の地カナンの分配と相続のため。

(2) 他の聖書箇所に見る人口調査とその意味

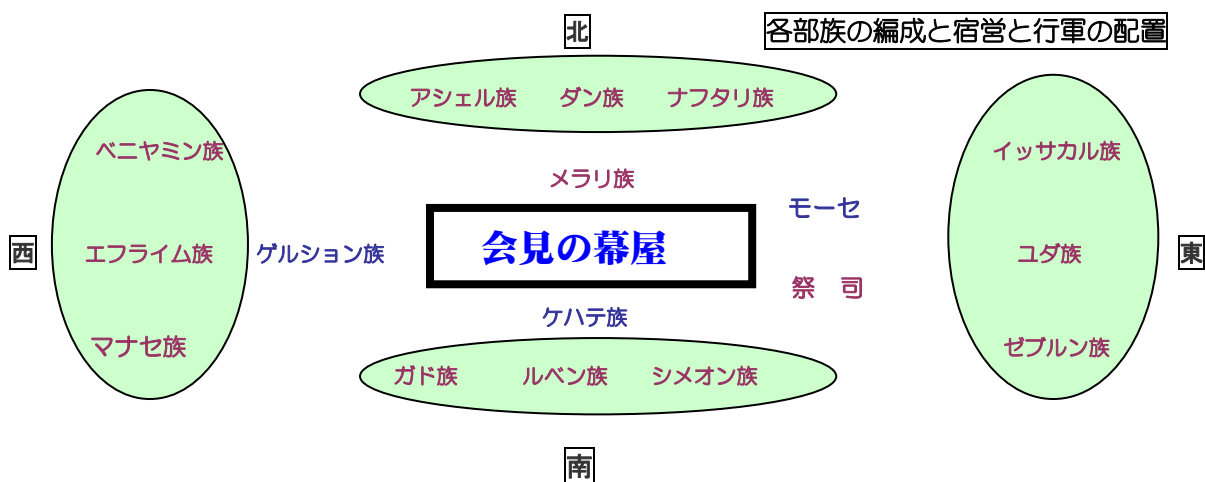
- ① ダビデの人口調査(Ⅱサムエル24章1～9節、Ⅰ歴代誌21章1～6節)と問題点
- ② ローマの皇帝アウグストの住民登録(ルカ2章1～3節)

3. 秩序立った配置、および神の導きによる整然とした移動、奉仕分担(2～10章)

(1) 幕屋を中心とした宿営の配置(2章)

◆イスラエルが荒野を旅するためには整然とした秩序が必要だった。

- ① 宿営の配置、および行軍の順序と仕方は全て神がみこころのままに定められた。
- ② モーセとアロン、およびその子らとレビ人は幕屋のまわりに宿営した。



(2) レビ人のそれぞれの奉仕分担

- ① ゲルシオン族・・・幕屋の幕類
- ② ケハテ族・・・聖所の中の器具類
- ③ メラリ族・・・幕屋の板類

(3) 組織におけるリーダーシップ(7章)

◆権威の秩序と情報伝達のための指揮系統がはっきりしていた。

- ① 神→モーセ→各部族のリーダー
- ② 神→モーセ→大祭司アロン→祭司→レビ人の各部族のリーダー

(4) 神の導き(9章)

- ① 18～23節には、民が「**主の命令によって**」(7回)一体となっている姿がみられる。「主の命令によって、イスラエル人は旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。」(9章18節)とある。神の臨在の雲が幕屋を離れると、一同は直ちに旅立った。
- ② これは実に大変なことであった。その理由は・・・
 - i. 予告なし・何の予告もなく、「昼でも、夜でも、雲が上がれば、彼らはいつも旅立った」(21節)
 - ii. とどまる期間も一定ではなかった・「二日でも、一月でも、あるいは一年でも」(22節)
 - iii. 大勢の人に関わることであった・・・この時のイスラエル人たちの総勢は、約二百万を超えていた。
- ③ これが可能となるためには・・・
 - i. 意志の服従・・・いつでも神の意志を自分の意志とすることなしに主の命令には従えない。
 - ii. 生活の構え・礼拝だけでなく、衣食住のこと、結婚や出産、労働、休息など実際的な生活がいつでも動けるようにそれ相応に整えていなければならなかった。
 - iii. 待つ訓練・・・何ヶ月も、一年も雲が動かないとき、そこにじっといるということは移動すること以上に困難であったに違いない。
 - iv. 神の命令は最善であるという信仰・・・たとえ自分には不都合で乗り気になれなくても、主が一番良い時に、一番良いようにしてくださるという信頼が必要であった。神の導きは最善と信じる信仰。

4. 不信仰的判断の暴露(13～14章)

(1) カナンの地への偵察の報告・・・全く正反対の見方に分かれた

- ① 人間的条件の不備に基づく不信仰的判断・否定的、消極的
- ② 主に対する信頼に基づく信仰的判断・積極的(ピリピ4章13節、マルコ9章23節参照)

(2) 不信仰的判断の結果

- ① 39年におよぶ荒野放浪を余儀なくされる。民数記33章にはその哀れな日記がある。「(彼らは)、・・・から旅立って・・・に宿営した。・・・から旅立って・・・に宿営し、・・・から旅立って・・・に宿営した」と。このように、旅立っては宿営するという繰り返し。出発するけれども、どこにも到着しない。目的のないさすらい、終わりのない堂々めぐりの繰り返し。あちこちとさ迷うだけで、何事も成し遂げることがない、達成感の喜びがない。神の約束を疑い、神に信頼しないとき、これが私たちの経験となることを聖書は警告している。
- ② ヨシユアとカレブを除く一世代がすべて死んだ。

5. 権威に対する反逆の霊(12章1～15節、16章)

(ウォッチマン・ニー『権威と服従』を参照)

(1) アロンとミリアムの非難(12章)

- ① アロンとミリアム(モーセの兄と姉)は、モーセの妻が外国人ということでモーセを非難した。しかし、それが本当の理由ではなかった。「主はただモーセとだけ話されたのでしょ
うか。私たちとも話されたのではないのではないか」とあるように、非難の真意は、神に
よるモーセの優位性に対する不満であった。モーセだけが与えられている主との特別な関
係、民がモーセに示す尊敬と従順、そのことに対するねたみが潜っていたことは否めない。
- ② 霊的権威は、その人の働きを通して与えられるのではなく、あくまでも神の召し(選び)
によって与えられるものである。
- ③ 神の代表権威を非難することは、神の怒りを引き起こすことが分かる。ミリアムはらい病
となり、宿営の外に隔離された。権威の問題が解決するまで、神の臨在は回復しない。

(2) コラとその仲間たちの反逆・・・集団的反逆(16章)

- ① 彼らは神の民の中に権威などいらないと考えた。彼らは集って、モーセとアロンに対して
「あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、主がそのうちにおら
れるのに、なぜ、あなたがたは、主の集会に立つのか」(16章3節)と訴えている。
- ② 神の支配(領域)におけるリーダーシップは、必ずしも民主的なものではない。

(3) 他の聖書箇所に見られる反逆の霊と服従の霊

- ① ハムの反逆(創世記9章20～27節)・・・代表権威の失敗は権威に服従する者にとっての
テストである。

◆ノアの失敗はハムの反逆の霊を暴露した。ハムは父の醜態を見たとき、それを覆うど
ころか、出て行って兄弟たちに告げ口し、父の恥を暴露した。反逆の霊があったからで
ある。しかし、セムとヤペテは後ろ向きになって、父の恥を覆い隠そうとした。ノアは
ハムに対してハムとその子孫を呪い、「彼はその兄弟たちのしもべのしもべとなる」と預
言した。これは、権威に反逆する者は決して人の上に立てないということを意味する。

- ② ダビデの権威に対する認識(1サムエル24章、26章)

◆最初の王として選ばれたのはサウルであった。しかし彼が王となったとき、彼自身は
神の権威に服従しなかった。それゆえ神はダビデを王として選んだ。ダビデはサウル王
からつけ狙われることとなった。サウルを殺すチャンスは二度あったが、ダビデは権威
に反逆する者となるよりは、王職が延期されることを選んだ。

▶私たちが、一方では他の人たちの権威の
下にあり、他方では他の人たちを自分の権
威の下に持っている。神ご自身以外のあら
ゆる人は、主イエス様も含めて、権威に従
わなければならない。私たちはいたるとこ
ろに権威を見るべきであり、特に、神の働
き人は、だれが自分の権威であるかを知ら
なければならない。



申命記

1. モーセ五書全体の主題と申命記の主題

(1) モーセ五書全体の主題・「神の民の確立」

書名	主題	内容
創世記	神の民の開始	墮落した人間(世界)の救いを担うべき神の民がいかにして始まったかを記している。
出エジプト記	神の民の成立	贖い、契約、幕屋によって、いかに神の民が神の民としての成立してか記されている。
レビ記	神の民の聖別	神の民が聖なるものに対して、いかに鋭敏な感覚を身につけるべきかを記している。
民数記	神の民の訓練	神の民が様々な状況の中で、いかに神を畏れて歩まなければならないかを記している。
申命記	神の民の自立	神の民の自立の条件として、服従か背反か、生か死か、二者択一の主体的決断の重要性を記している。

(2) 申命記の主題・「神の民の自立」について

- ① 「神に選ばれたイスラエルが出エジプトという歴史的経験を通し、さらに荒野放浪の体験を通して訓練されたのは、すべて奴隷状態から脱皮して、選民的に自立させるためであった。選民的に自立するには、選民各自のうちに〔選ばれて・選ぶ〕という主体的決断の確立が決定的である。そこには選民側の応答としては、選び主への服従か背反か、祝福か呪いか、生か死かの二者択一しかない。」
(岡村民子著「聖書各巻のかけがえのなさ」73頁)
- ② 「自立」とは、愛されて愛するという信仰的・主体的決断に基づく服従の選択意志を意味する。注解者の多くが申命記の主題を「回顧と展望」としている。それは、自動車のバックミラーのように過去を顧みつつ、これから進むべき道を展望するために、神の真実に対する責任ある主体的決断をもった服従が要求される。モーセ五書の最初の四書で、神はイスラエルを選び、申命記では神がイスラエルの民一人一人に対してご自身を選ばせようとしておられる。そして厳粛に「あなたはいのちを選びなさい」と命じている。
- ③ ヨシユアの「あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家族とは主に仕える」との告白(ヨシユア記2章15節b)。ヨハネ2章21節参照。

2. 申命記の名称、執筆意図、および時期

(1) 名称

- ◆「申命」とは「重ねて命令する」という意味である。約束の地を目前に見ながら、出エジプトの経験もシナイ山での契約の経験もない第二世代の民に対してモーセはシナイ契約を再確認しながら、重ねて命令している。

(2) 執筆意図

- ① 荒野40年の間に世代は交代した。モーセは新しい世代に、再度、律法を説明して神との契約を更新する必要性があった。
- ② 神が先祖に誓われた約束の地がどんなにすばらしい地であるかを教え、そこへ入っていくための備えが必要であった。その備えとは、カナンへの占領、敵に対する勝利、繁栄、幸

福はすべて、民たちの服従によるものであることを教えなければならなかった。ロバート・リーは「本書はすべて服従についての神の論文である」と述べている。

(3) 執筆時期

- ◆イスラエルの民がモアブの草原に到着した後、39年目の11月の1日から、翌年の1月10日にヨシユアに率いられてヨルダンを渉るまでの二ヶ月と10日の間に書かれた。その間、モーセによる1ヶ月間の喪の期間がある。申命記全体がモーセの決別説教と言える。

3. 申命記の構造

回顧〔1～11章〕	展望〔12～34章〕
① シナイからの道程の回顧 (1～3章)	① カナン定住後に直面する問題と警告 (12～30章)
② シナイで与えられた律法の反復(4～11章)	② モーセの生涯の締めくくり (31～34章)

モーセ五書			
創世記/出エジプト記/レビ記/民数記	申命記	ヨシユア記～ エステル記	イザヤ書～マラキ書
	回顧と展望 (歴史書の序論)	歴史書	預言書

4. モーセ五書、および旧約における申命記の位置づけと申命記の危機的性格

(1) 申命記の位置づけ

◆申命記はモーセ五書の最後に位置し、出エジプト後の歴史を回顧すると同時に、ヨルダン渡渉後の生活を展望することにより、ヨシユア記以下の歴史書の橋渡しをなす重要な位置を占めている。歴史書、および預言書はすべて申命記における契約の視点から解釈し見直されている。過去における神の真実を無視する者は、未来をも見据えることはできない。神の民が自立するための回顧と展望、これこそ聖書が示す基本的姿勢である。

(2) 申命記の危機的性格

◆申命記は新しい局面を迎えようとする<危機的性格>を持って書かれた書である。次の四つの面において・・・

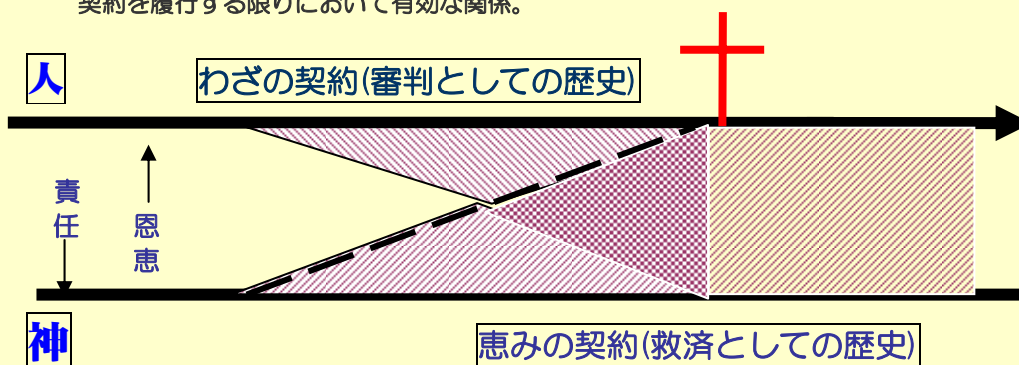
- ① 新しい世代・・・古い世代はカレブとヨシユアとモーセを除いてすべて死に、新しい世代へ移行した。
- ② 新しい地・・・荒野での放浪生活は終わり、約束の地カナンを占領しようとしていた。
- ③ 新しい経験・・・移動生活から定住生活へ。荒野でのマナからカナンの地の産物へ。
- ④ 新しい啓示・・・創世記から民数記まで一度も出てこないことばが申命記にはある。それは神の「愛」ということばである。申命記ではこの特別な愛の啓示が9回出てくる。その中から・・・

- i. 「主は、あなたの先祖たちを愛して、その後の子孫を選んでおられたので、・・・」(4章37節)
- ii. 「主があなたがたを悪い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。・・・しかし主があなたがたを愛されたから・・・あなたを贖い出された」(7章7～8節)
- iii. 「主は、・・・彼らを愛された」(10章15節)
- iv. 「あなたの神、主は、あなたのために、のろいを祝福に変えられた。・・・主はあなたを愛しておられるからである。」(23章5節)

- 預言書のイザヤ書43章4節、エレミヤ書31章3節、マラキ書1章2節を参照。
 ここには、契約の愛とは別の「選びの愛」、換言するなら、「シナイ契約」における神の恵みとは別なサイト、つまり、「シナイ契約」ではなく、「アブラハム契約」における神の真実が流れている。
- イスラエルはシナイにおいて神と契約を結んだ。その契約とは「今、もしあなたがたが、まことに、わたしの声に従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」(出19章5～6節)である。シナイ契約の特徴は「もし、あなたがたが、・・わたしの声に従い、契約を守るなら、・」とあるように、人間側の決意と努力が求められる。シナイ契約の特権とそれに伴う責任は非常に大きなものがあつた。それゆえ、イスラエルの不従順による違反は厳しい刑罰が科せられ、呪いが臨むことが警告されている。その最も重い罰は、イスラエルの離散とカナン人の荒廃であつた。
- 悲しむべきことに、イスラエルはこの契約を破ってしまった。その結果、イスラエルの民は捕囚の民となって離散し、亡国の憂き目にあつた。これはシナイ契約で預言されてきたことである。しかし、ここではっきりと知っておかなければならないのは、シナイ契約が神とイスラエルを結ぶ唯一のものではない。実は、もうひとつの契約関係がある。それはシナイ契約の外側にあり、シナイ契約を越えた、無限の保障をもつた契約である。それがアブラハム契約である。それは何ものによつても、打ち壊すことの出来ない契約である。それは血によつて調印され、神の誓いによつても確認された。この契約は、イスラエルの不誠実さも、また神ご自身さえも、決して無効にすることができないものであり、アブラハムとその子孫に対する、無条件の、永遠に変わらない契約なのである。そしてこの恵みの契約は、イスラエルの民ができなかったことを、神が彼らのために、成し遂げてくださるといふ神の熱意に裏付けられているのである。エレミヤ書31章31～34節の「永遠の愛」による未来の展望は、このアブラハム契約に基づいている。

アダム契約、シナイ契約—シケムで更新、ヨシヤ王宗教改革時に更新、捕囚後更新

- 人間側の主体的性格が強い。契約条項の律法を行なうという決意と努力が要求される。契約を履行する限りにおいて有効な関係。



原福音、ノア契約、アブラハム契約、ダビデ契約—イザヤ55章、エレミヤ31章、ホセア2章、エゼキエル16章、34章—(ここには預言者による新しい契約の預言がある)

- 人間の側が契約条項に違反したり、契約そのものの破棄したとしても、神の側は、契約関係を切ることなく、あくまでも契約の継続を求め、その回復のための手立てを講じようとする関係。

●選びの愛(アーハブ)と契約の愛(ヘセド)との相違について

5. 申命記の鍵語とその使信

(1) 鍵語・鍵句

- ① 「聞け」(シエマー)。聖書において、聞くことは、主を愛すること、主に従うこと、主の命令を守ることとイコールである。申命記6章4～5節、10章12～13節。ヨハネ14章21、23節参照。
- ② 「(主は)私たちをそこから連れ出された。それは私たちの先祖たちに誓われた地に、私たちを入れて、その地を私たちに与えるためであった。」(6章23節)

(2) 使信

- ① 愛にもとづく神への**服従**〔従順〕の要求・・・上記参照。
- ② 「連れ出された」という**事実**、「入らせるため」という**目的**、「先祖たちに誓われた」という**理由**
 - i. 「連れ出された」**事実**とは、神の力によって、過酷な苦役も、鉄のかせも、いまわしい奴隷の身分も与えられた状態も、エジプトの辱しめもすべてが取り去られた。これは神の事実である。
 - ii. 「入らせるため」の**目的**とは、前方にはカナンが待っている。そこには、ぶどうやいちじく、ざくろが実り、丘や流れがあり、オリーブや杉がおい茂り、乳と蜜、穀物、ぶどう酒が豊かな良い地である。→申命記8章7～10節、11章10～11節。イスラエルの民はこのようなカナンの祝福を楽しめるにもかかわらず、今、荒野に住んでいるのである。これらは、キリストにある天にあるすべての霊的祝福のひな型である。
 - iii. 「先祖たちに誓われた」**理由**とは、神は決して約束を破ることのない方ということである。民の荒野での不信仰や反逆にもかかわらず、神はなおも恵みの契約に真実であってくださる。
- ③ [福祉理念]・・・申命記ではイスラエルが神に特別に祝福された者としての自覚を促すかのように、より多く祝福された者、また強い者は、弱い者の弱さを担う負債感が触発されている。
 - i. 「7年の終わりごとに、負債の免除をしなければならない。そうすれば、あなたのうちには貧しい者がなく」
 - ii. 「(主は)・・・みなしごや、やもめたちにさばきを行い、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。あなたがたは在留異国人を愛しなさい。・・・あなたがたもエジプトの国で在留異国人であったから」(10章18、19節)

6. 申命記と新約聖書

(1) 申命記とイエスの関係

◆イエスは申命記から実に多く引用されている。特に、イエスが荒野でサタンの誘惑に会われたとき、三度とも申命記からの引用をもって答えられた。

(2) 申命記とマタイ福音書との関係

◆マタイ2章15節「・・・これは、主が預言者を通して、『わたしはエジプトから、わたしの子呼び出した。』と言われた事が成就するためであった。」(イエス=第二のモーセ)

イスラエル2000年歴史	踏み直しの論理	イエスの30年の生涯に集約
出エジプト		マタイ2章15節
紅海渡渉		イエスの受洗
荒野放浪(40年間)		イエスの誘惑(40日間)
モーセ五書		五つの説教(マタイ福音書)
失敗の歴史		罪なき生涯
捕囚と解放		十字架と復活

モーセ五書の学びのための設問

- 1 モーセ五書の全体の主題と各書の主題とその内容を記しなさい。
- 2 モーセ五書を一つのまとまりとしているのは何を説明せよ。
- 3 旧約聖書におけるモーセ五書の位置づけについて説明しなさい。
- 4 全聖書66巻を「救いと生活の唯一の規範である」とする告白の裏づけが何を説明しなさい。
- 5 創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の各書の構造を記しなさい。
- 6 創世記の1章から11章までの出来事を出来るだけ多く記しなさい。
- 7 アブラハムの生涯における転機について記しなさい。
- 8 ヤコブの生涯における転機について記しなさい。
- 9 神と民がシナイ山で結んだ契約における三つの特権について記しなさい。
- 10 幕屋の構造を正確に記し、その建造目的について記しなさい。
- 11 レビ記に記されている5つのささげものについて説明せよ。
- 12 民数記において権威に対する教えを扱っている出来事を説明せよ。
- 13 旧約聖書における申命記の位置づけについて記しなさい。
- 14 申命記の鍵語は何か。またその危機的性格について説明しなさい。